慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	赤字財政論 Unbalanced Budgets. By Dalton, Thomas, Reedman,Hughes and Leaning. 1934を読みて
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.11 (1934. 11) ,p.1797(141)- 1804(148)
JaLC DOI	10.14991/001.19341101-0141
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19341101-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「赤字財政論」

Unbalanced Budgets. By Dalton, Thomas, Reedman, Hughes and Leaning. 1934 を讀みて

永田清

言葉の嚴密なる意義に於ては、「不均衡財政」は次の二個の場合を意味する。一は支出が收入を超過する場合であり、他は收入が支出を超過する場合である。論理的には、此れ等双方の場合に於て財政の不均衡が現れるからである。併し乍ら、普通の用語に依れば、支出が收入を超過する場合のみを不均衡財政と稱し、收入が支出と同額であり又其を超過する場合には、これを均衡財政と謂つて居る。即ち一般には、不均衡財政は直ちに赤字財政を意味するのである。蓋し赤字財政は現實財政現象の世界的象相であり、且つ各國皆其の克服策に腐心して居る時代現象が、赤字財政の問題性を彌々顯著にするためであらう。正しく謂へば、過剰(黑字)財政も亦等しく問題にせられねばならぬ。私經濟に於ては、收益の過剰は喜ぶべき現象である。併し此點に於て國家經濟と私經濟とは根本的に相異する。財政の理想は正しき收支の均衡にある。假りに財政に於て過剰金が生じたとすると、其は恐らく次の三個の場合からであらう。第一は見積りの誤である。此は全然技術的の問題であつて、其不正なることは言を俟たぬ。第二は景氣

好轉其の他の爲め一會計年度中に生ずる收入の增大である。併し此現象は永續的に現れるものではない。何故ならば、現實の國家は遂行すべき多くの社會的機能を有して居るから、次年度には直ちに此方面に支出せられるからである。第三は國家機能の不完全なる遂行である。此問題は、動的に看れば、第二の場合と結び付くものである。孰れの場合に於ても、國家機能の不遂行は許さるべきでない。假りに過剩財政を喜ぶものありとすれば、一部の夜警的國家機能論者のみであらう。現實の情勢から謂へば、以上の過剩財政は單なる想定的のものにすぎない。謂はば、今日の財政現象の一般的特徴は膨脹財政に基く赤字財政である。「世界的赤字財政は經濟並に金融に於ける世界的混亂の明らかなる徵候である」(Unbalanced Budgets, p. 12)。故に斯る赤字財政を極めて重要なる現實問題として採りあげることは當然と謂はなければならぬ。

一萬磅の基金を有する Adand Travelling Scholarships は一九三二—三度の事業として「歐洲諸國に於ける、特に財政に關する近代國家政策の包括的研究」を行ふことを決定した。こゝに紹介する "Unbalanced Budgets" は其研究報告書である。調査報告者は三人の青年學徒であつて、Brinley Thomas はベルリンに九個月 Hughes、はローマに九個月、Reedman はジュネーヴに六個月とパリーに三個月間滯在調査した。研究指導者ロンドン大學教授 Hugh Dalton は以上の報告を纏めてこれに序文と結論とを付し、且つ彼れの助手 W. J. Leaning のロンドンに於ける調査たる濠洲・ニュウジーランド及びアメリカ合衆國の財政事情略說を加へて居る。此書の內容を摘記せんに、第一編は二章に分たれたる Dalton の序文、第二編は九章に分たれたる Thomas の獨乙財政調査、第三編は五章に分たれたる Hughes の伊太利財政調査、第四編は三章に分たれたる Reedman の佛蘭西財政調査、第五編は等しく Reedman の他の歐洲諸國（デンマアク、スウエデン、オランダ、スキス、ベルギー、オオストリア、チェッコ・スロヴアキア、ポーランド及びフインランド）の財政調査四章、第六編は三章からなる Leaning の濠洲・ニュウジーランド及びアメリカ合衆國財政事情略說、第七編は二章に分たれたる Dalton 教授の結論である。此處に調査資料に就て一一紹介する必要はないであらう。赤字財政が世界的の流行病であることは異論がない。各國に現れる其象相の相異性は單に數學的相對的意義をもつにすぎぬから、こゝでは此世界的現象を全般的に認識し且つ此事實を如何に理解するかにとゞめやう。

この爲めには Dalton の序文と結論とが分析されねばならぬ。Dalton に從へば、赤字財政は、經濟恐慌から區別されたるものとしての金融恐慌の重要なる一部分を構成する。今日經濟學者の間に於て、物價の下落が景氣沈滯の原因であるか又は其結果であるかに就ての論爭がある。併し乍ら彼れは斯る論爭を無用と考へて居る。蓋し其が孰れであるにもせよ、物價の下落が赤字の主要なる直接原因であることは確かだからである。然らば物價の下落は財政に如何なる影響を及ぼすであらうか。物價が下落すれば、國家收入は總括的に減退する。物價に基く租稅收入は、其財貨が國內に於て生產せられるにせよ、國外より輸入せられるにせよ、物價下落に從つて減少する。更に課稅物件の數量が尠くなれば、斯る收入は一層減退する。又商業取引の價値と數量とは少くなり、從つて斯る取引に基礎をおく印紙稅收入も減少する。取得稅に就て謂へば、多くの租稅納入者の貨幣所得が減るから、此取得稅收入も尠くなる。其減額の程度は、累進課稅の率が大であればある程多額となるのである。猶ほ、官業收入が減ることは一般私企業の場合と同樣である。これに反して、物價の下落は經費に對して直接の影響を及ぼさぬ。無論國家の購入する財貨の價格は下落するから、幾分の支出減額が生ずるが、他面に於て、失業者の救濟、時局匡救費の支出を必要ならしめる。そこで、政府は經費の削減を行はむとする。然し斯る節約は反對に遭ひ、また其が實現される場合

には、收入は更に減少するであらう。同樣に政府は增稅を企圖する。然し增稅の結果は更に物價を引き下げ、景氣沈滯を一層深刻ならしめるから、これに充分の期待をかけることは出來ぬ。

物價の下落が財政に如何なる影響を及ぼすかに就ては、略、同樣の說明がマックミラン報告書中にあるから、其を左に引用する。

物價の暴落は、財政の方面に於ても、國家の歲入及び經費の兩面に作用して國家豫算の均衡を破壞するが如き大きな影響を齎らして居る。其重壓をうけて居る部面は單に之を次の如く要約しなければならぬ。

(1) 國家の歲入は總ての歲入科目を通じて思はしからざる影響をうけがちである。事業界の不振は所得稅及び附加稅の對象たる利潤（配當金を含めて）額や、遺產稅の對象たる遺產の査定額や、印紙稅の對象たる取引額を減少せしめ、且つまた貨物消費額の減少のみならず、其價格の低落によつて關稅及び消費稅の收入を減少せしめて居る。その結果、國家が貨幣の名目で收入を得る必要がある限り、國家はこれが對策として課稅水準の引き上げ、若しくは課稅範圍の擴張によらなければならない。

(2) これと同時に、今日の事態に於では、失業狀態の救濟又は失業者に對する給付の必要から、ある方面に於ける經費膨脹の傾向がある。

(3) 國家經費の中には債務利子の形態で契約される部分が多い。斯る經費は有利な情勢のとき任意又は支拂期日に於ける借換によつて輕減する以外に方法がない。更に經費の中多額の部分は立法によつて貨幣の名目で其額が確定されて居る（例へば各種の年金給付、健康及び失業の基金並に其他の社會費に對する給付金）。而して經費は貨幣價値の變動が生ずる場合でも容易に變更し得るものではない（Committee on Finance and Industry, Report. pp. 89-90 邦譯一四九—一五〇頁）

更に同委員會の報告書はイギリスの租稅負擔と契約經費とを次の如く例示して居る。事態を課稅總額の點から見るならば、イギリスの課稅額は名目では一九二〇—二一年から一九二九—三〇年に至るまでに一人當り一二磅から一四・八磅に減退し、他方地方稅負擔は一人當り三・九磅と變らなかつた。斯くて課稅總額は一人當り一二五・九磅から一八・七磅に減少した。併し乍ら、此期間に於ける物價の變動から看れば、商品の價値は約一八磅から二〇磅に昇騰したことになる（生活費指數を基準として一九二四年の價値で表はす）。かくして課稅の名目價値を約三分の一輕減しても、猶ほ實質に於て租稅負擔を加重したことになる。豫算のうち年金及び社會費の形態をとる契約上の部分が幾何に達するかを算定することは困難であるが、經常費總額のうち債務利子を含めて約六〇乃至七〇パアセントが此性質のものであることは疑なきもののやうである。斯くして物價水準が下落するに從ひ、歲入は減退し、支出の極めて大なる部分は多かれ少かれ貨幣の名目で決定されて居る。他面に於ては、例へば流動公債の費用が下り、大規模の借換が可能となると謂ふやうな有利な影響もある。併し乍ら、歲入當局者にとつて留意すべき最も重要なることは、物價の將來の動きが不確定である限り、債務形態の如何を問はず、國家の契約に基く債務の著しき增加は之を避くべきものであるやうに思はれる（Committee on Finance and Industry, Report. p. 90 邦譯一五〇—一五一）

猶ほ同報告書は物價暴落の社會的影響は經濟上に於ける直接の影響よりも多くの點に於て更に重要であると謂つて居る。何故ならば、物價の變動は社會の種々なる階級間に於ける微妙なる平衡關係を解體し、その爲め大なる困難が生ずるからである。强烈なる物價の變動は、經濟的混亂を齎らすと同樣に、社會的混亂を招致する。洵に社會

的紛擾の主たる秘密は、物價水準の變動及びこれより生ずる債權者と債務者、企業家と勞働者、農民と地主との地位の變化に在る(Committee on Finance and Industry, Report. pp. 91-92. 邦譯一五二—一五三參看)。

以上の報告は Dalton 教授の說明と全く同一である。事實上一九二九年の世界恐慌を契機として赤字財政が顯著に現れたことも異論がない。從つて、本書の報告者達も亦、主として一九二九年を出發點として赤字財政の調査を進めて居る。然らば、斯る赤字財政の調査と分析との結果、如何なる結論が導き出されるか。Dalton は伊太利の場合を例示して官業擴大の原理を主張する(p. 447)。國家(統合社會體)が從來の夜警的機能の充足のみに滿足せず、進んで生產性の獲得に向つて居ることは、現代財政現象の著しき特徵である。斯る國家形態を吾々は二つの場合に於て看ることが出來る。一はファッショ形態に依る伊太利・獨乙の統制經濟及びアメリカ合衆國のニラ政策であり、他は勞農露國の計畫經濟である。官業論を展開すれば、論理上當然にこの計畫經濟論が統制經濟論かに發展する。Dalton も亦、「再發恐慌の疫病から逃れる唯一の途は統制經濟にある」(Ibid., p. 458)と謂つて居る。但し彼れが斯る統制經濟の理論を論述せず、また其總括的なる具體的政策をも提示して居らぬのは甚だ遺憾である。一切の經濟調査がそうであるやうに、赤字財政の調査も亦それだけでは價値がない。斯る調査を基礎として何等かの理論の認識か具體的政策の提示かが必要である。

更に教授は赤字財政の現象を主として物價下落の直接的原因から說明して居るが、此現象は資本主義との本質的關聯に於て說明理解さるべきではなからうか。惟ふに、初期資本主義の生誕は警察國家を變じて自由主義國家たらしめた。國家の自由主義的理念は則ちその經濟的活動の壓縮である。謂はゞ、その時代に於ける國家の本質的機能は、私的資本がその全幅の作用を發揮する爲めに必要なる社會的秩序を作り出すことであつた。それと同時に、資本の活動に不適當なる領域が僅かに國家活動のために殘されたにすぎない。從つて、國家はこの種機能を遂行するために必要なる經費を强制獲得による租稅に仰いだ。この意味に於て資本主義經濟と租稅國家とは不可分の關係にあると謂へるのである。然るに、資本主義の進行は國家機能それ自體の變形を必然的のものとした。即ち資本主義發展の過程に於て生ずる社會的摩擦の除去策としての社會政策的活動の發生である。假りにこれを狹義の社會的國家と謂はふ。然らば斯る社會的國家は何を招來するか。國家活動の結果が間接的に何等かの經濟的收益を齎らすならば、其の爲めに使用される經費は兎に角生產性をもつものと謂へる。然るに、斯る社會政策的活動に必要なる經費は直接には何等の生產性をも持たぬ。故に此經費は經費自體として看れば、國家を重壓する以外の何等の意義をも有せぬのである。このことは國家の貧困化、從つて生ずる租稅國家の危機を意味するであらう。國家の貧困化を齎らす他の原因は國家自體の外敵に對する强力化に必要なる經費の支出にある。資本主義の發展は帝國主義的活動と必然的に連繫するものであるから、斯る經費の支出も亦資本主義經濟組織に伴ふ必然性をもつものと謂はなければならぬ。經費膨脹の現象が必然的であり、然かも再發恐慌の深刻化に依て收入の減退が招致せられるとするならば赤字財政の現象は愈〻固定化して行くであらう。孰れにもせよ、赤字財政の說明には、Dalton の謂ふ恐慌の反映としての收入減と同時に、經費膨脹の社會理論的解明が必要である。左に、此の問題に對するロェプケの說明を引用しやう。

「經費は國家目的に從ふ財政的支出形態にすぎないから、其歷史的發展は、國家觀、國家理想、國家自體の發展を如實に反映する。國家目的の擴大、法治國家の自由理想より文化國家の理想への發展、更に進んで、政治的支配圈の擴張と結び付く經濟擴大(帝國主義)並にそれに伴ふ國家の國民主義的・軍國主義的强調のために、國家經費の雪崩

の如き膨脹が生ずる」（W. Röpke, Finanzwissenschaft. S. 49）と。

Dalton 編の此書には斯る科學的論究は全然ない。彼れが各國赤字財政の調査より得たる結論は單に道路としての統制經濟と謂ふことだけである。それに關しても、唯だ方向を指示するだけで、詳細なる論究には及んで居らぬ。前述した如く、此書は年少研究生の調査を發表し、併せて Dalton の簡單なる序文と結論とを付しただけのものであるから、これに以上の如き赤字財政に關する科學的究明を求めることは無理であらう。Dalton 自身としては、財政學者の立場からこの調査を基礎として理論の展開を試みるであらう。こゝに吾々の大なる期待がかけられると同時に、此書も亦その場合に於てはじめて充分なる價値をもつに至るのである。

最近經濟文獻

（昭和九年十月二十日調）

〔理論經濟學〕

＊資本蓄積論（中卷）　ローザ・ルクセンブルグ、長谷部文雄譯（岩波文庫）　菊半截二三九頁　岩波書店

＊貨幣、第一册—貨幣の基礎概念　友岡久雄著　菊判一六三頁　……嚴松堂

科學の方法としての唯物辯證法（唯物論研究、二四號、昭和九・一〇、一九二—二一五頁）　山岸辰藏

經濟生活の本質（國民經濟雜誌、五七卷四號、昭和九・一〇、一—一八頁）　丸谷喜市

不合競爭について（經濟論叢、三九卷四號、昭和九・一〇、一九—三六頁）　高田保馬

使用價値の再認識（中央公論、四九年一二號、昭和九・一一、二九—三九頁）　二木保幾

ヴィクゼルの自然利子論（上）（經濟論叢、三九卷四號、昭和九・一〇、九三—一一五頁）　青山秀夫

貨幣的景氣理論の基本類型（二）（國民經濟雜誌、五七卷四號、昭和九・一〇、一九—四四頁）　新庄博

ハンス・ペーター著「現代經濟理論の任務」（三田學會雜誌、二八卷一〇號、昭和九・一〇、一四二—一五〇頁）　氣賀健三

中山伊知郎氏「純粹經濟學」（商業經濟論叢、一二卷別册、昭和九・九、一一五—一三三頁）　宮田喜代藏

＊Bauer, A.: Die Ertragstheorie in der französischen Literatur. Würzburg. 1933. 60 S. Innsbruck, Diss.

＊Biaujeaud, H.: Essai sur la théorie ricardienne de la valeur. Préf. de Gaëtan Pirou. En appendice, lettres de Ricardo. Paris. 1934. IX, 247 p.

＊Bölza, H.: Ein neuer Weg zur Erforschung und Darstellung volkswirtschaftl. Zusammenhänge. Vortr. Würzburg. 1933. 47 gez. Bl. mit Abb.

＊Brauer, T.: Die Einfüllung der Volkswirtschaft. Ein Studie über d. »Gegenstand« d. Volkswirtschaftslehre. Jena. 1934. 100 S. M 3,50.

＊Eucken, W.: Kapitaltheoretische Untersuchungen. Mit e. Einl. in d. Sammlung: Was leistet d. nationalökonomische Theorie? Jena. 1934. 194 S. (Problème d. theoret. Nationalökonomie. 1.) M 8.

＊Gossel, F.: Gebildtheorie und Universalismus in der theoretischen Nationalökonomie. Ein methodol. vergl. Unters. d. Theorien von Fr. v. Gottl-Ottlilienfeld u. Othmar Spann. Braunschweig 1933. 120 S. Hamburg, Diss.